

世界遺産クラブ・沖縄研修旅行

世界遺産検定（文科省後援）の全国的な組織・世界遺産アカデミー常務と世界遺産クラブのメンバー、あわせて12人が来沖されました。琉球弧世界遺産学会としては初の交流です。皆さん研究熱心な方ばかりなので、琉球の歴史が良く分かるスポットばかり、なかには「??」と頭にクエスチョンマークが点るような場所も選びご案内しました。7月24日から3泊4日の感想を10人の方から頂きました。



ペリー上陸碑の前で

沖縄研修旅行の感想文

2014年8月10日
小六 克介

今回の世界遺産クラブの研修旅行はかなり過密なスケジュールにもかかわらず、私を含め全員が疲れを感じないほど充実したものでした。

是非お会いしたかった當眞先生にもお会いすることが出来ました。先生は「琉球王国は中国や日本などに囲まれながら巧みな外交手腕で王国の独立を保っていた。今の日本は琉球王国の知恵を学ぶべきではないのか。」という趣旨のことを言っておられました。まさにその通りだと思いました。先生からはグスクなども含めもっとゆっくりお話を伺いたかったのですが、それが出来なかったことが今回の旅で一番残念なことでした。

やんばるツアーをご案内いただいた新垣先生、首里城跡。園比屋武御嶽石門、識名園など丁寧に説明いただいた盛本先生、ありがとうございました。これだけの先生方にご案内いただくことができたのは、ひとえに、緒方先生のおかげと本当に感謝しております。

グスクなどへの訪問では今帰仁グスクを学ぶ会の事務局長であり、案内ガイドをされている山内（やまのうち）さんの詳しい説明をはじめ、現地ボランティアの方々の熱心な説明にみんな真剣に聞き入って予定時間をオーバーしてしまいましたが、大変参考になりました。（次頁へ）

「百聞は一見にしかず」とはよく言ったものだとあらためて感じました。當眞先生の本に中城城跡の城壁が見事であるとありましたが、写真ではよくわからなかったのですが、現場に立つとそのスケールの大きさ・雄大さ・素晴らしさに圧倒されました。現場に立つとやはり本などからの知識だけでは到底及びもつかないことを実感しました。

ただ、今回の研修旅行では、日数が限られていたにも関わらず、お会いしたい先生や訪問先がどうしても多くなってしまい、その分スケジュールがきつくなると同時に、総花的になってしまったのではと反省もしています。

現地入りし、いろいろな方々とお話ができて地域で文化遺産を守るために地道に努力されておられることもわかりました。世界遺産は不動産ですが、形には表れない無形の独特の文化・風習が沖縄にはあり、これも後の時代にしっかり伝えていただきたいと思いました。独特の文化といいましたが、沖縄の文化・風習は本土において古代にあった縄文時代の風習と酷似しているところがあり、現在では東北の一部・北海道のアイヌの方々に残っているように感じます。

また、うちなーぐち（沖縄の言語）も、大切に守ってほしいと思います。ユネスコは 2008 年に消滅に瀕した危機言語として日本では 8 言語が挙げられ、その内の 6 言語が沖縄の言語です。八重山語・与那国語・宮古語・沖縄語・国頭語・奄美語です。これらの言語は日本語の一方言ではけっしてなく、別の言語であるとユネスコも認めているようです。これらの言語をどのように守ってゆくのか、現在、取り組み始めているようですが、学校で教えるようになるには時間がかかるのではと思います。せめて家庭内でおじいちゃん・おばあちゃんが子供達・孫達に話すようにしたり、また、地域でそのような会を定期的に行って話す機会を持つようにしたらと思います。私は東京の下町で育ちましたから、娘からは「パパはなまりが多く、しかもぶっきらぼ一な、きつい言い方をする」とよく怒られますが、私は標準語を話そうとは思わないし、いまさら変えられもしません。「ばかやろ一、ろくなもんじゃーね一な」と昔の友達に言ったら「なつかし一な一、その言葉」と言われました。現在では下町でもこのような言い方をする人は少なく死語になってきているのです。まことに残念です。「そうでうね。」「そうでございますよ。」なんて言ったら江戸の文化なんてものは引き継げないですよ。沖縄の言葉が標準語になってしまったらこれまで連綿と受け継いできた文化がどっかへ行っちゃいますよ。沖縄ではこのようなことにならないように是非お願いしたいものです。

今回の研修で世界遺産についていろいろな方とお話させていただき、いろいろ教えていただきましたが、それを通して沖縄の文化・風習に少し触れることが出来たのかなと思っています。沖縄の世界遺産を大切に守ると共に、沖縄の文化・風習もしっかり受け継いでいただけるよう心から願っています。

沖縄研修に参加して 2014/07/24-26

南井 都美子

I 印象に残った場所

ペリー提督上陸記念碑

日本開国という歴史を動かした人物、アメリカ東インド艦隊司令官・ペリーの足跡を記した碑。ペリー艦隊は日本との交渉の前に琉球へ来航し、1853年5月26日に那覇港に入港し、同年6月6日、首里王府の抵抗を押し切って上陸し、首里城を訪問した。

斎場御嶽

沖縄本島南部、南城市の海の近くにあり琉球王国時代から聖地としてあがめられている場所。聞得大君の就任儀式「御新下り」（おあらおり）が行われた。聞得大君（きこえおおきみ）とは琉球大国の最高神女で、王の妃や娘などの親族の女性がその職に就いた。

御門口（うじょうぐち）には四角い香炉が6つ置かれていて、王国時代はここから先に入れるのは王府の関係者のみで庶民たちはこの御門口から香炉に手を合わせて拜んでいたそうだ。

右手に海と久高島が見える。「大庫理」（うふぐーい）石で造られた四角いステージで、その上に覆いかぶさるように琉球石灰岩の巨石が張り出している。「御新下り」では、ここで神女が聞得大君を祝福する祈りを捧げたという。最奥には真っ青い海の向こうに久高島を見渡す拝所がある。

識名園

王家の別邸の庭園として造営された。中国皇帝の使者である冊封使を接待する場所であった。琉球・中国・日本の庭園様式を折衷している。

今帰仁城跡

14世紀 北山王の拠点となった城。中国貿易が行われていた証拠となる陶器片が見つかる。

II 琉球王朝のグスク及び関連遺産群の世界遺産としての価値

琉球諸島は数世紀もの間、東南アジア・中国・韓国・そして日本との経済的・文化的交流の中継基地として貢献してきた。

登録基準からみて。

(ii)・・・文化の交流

12～17世紀に繁栄した琉球文化を今に伝えている。

中山王の尚巴志は明・日本をはじめとする東南アジアとの中継貿易をしていた。

(iii)・・・現存また消滅した文化伝統を今に伝える

琉球王朝は消滅したが、ニライカナイと呼ばれる神々の住む島が海のかなたにあるという信仰は今も沖縄の人々の中に受け継がれている。

首里城は戦争によって、消滅してしまったがその遺構を見ることができた。

(vi)・・・顕著な普遍的価値を持つ出来事もしくは生きた伝統

琉球地方独特の自然観に基づく信仰形態の特質を示す。

古くからの宗教上の慣習が長期間にわたって生き続け、仏教やキリスト教のような世界の主要な宗教にも影響されなかったという事は非常に興味深い。現在の沖縄にも、その宗教観は深く根付いており、久高島では昔ながらの祭事が今に受け継がれている事をした。琉球は周りの列強の諸外国のなかにあっても、アイデンティティーを失わず、生き続けていた力強さは現代にも受け継がれているのではないだろうか。

個人的には、勝連城の、最後まで国王に抵抗しグスクを守って戦ったという按司・阿麻和利の生き方に興味をもっている。始まりはNHKで放映されたドキュメンタリーの番組であった。地元の覇気の無い子供たちを憂い、勝連町の教育長が舞台づくりを通じて地域の歴史を知り、誇りを持つことを願ってはじめられた「現代版組踊」按司・阿麻和利は、日増しに成長していく生徒たちの様子が非常に印象に残っている。そして、生徒たちは国王にも抵抗し続けていった地元のヒーローとして按司・阿麻和利をとらえているようにみえた。個人的には、按司・阿麻和利という人物について今後、調べてみたいと思う。

このように貴重な経験を与えてくださった沖縄の緒方先生はじめ皆様方、また世界遺産アカデミー、世界遺産クラブの小六さんには大変感謝をしています。



初めての沖縄で世界遺産の構成資産を全て周ることができ、大変満足しております。このような環境を整えてくださった小六さん、素晴らしい行程を考えてくださった緒方先生はじめ琉球弧世界遺産学会の先生方に感謝しております。

さて、沖縄というと、以前は「キレイなビーチ」、「暖かいところ」、「米軍基地」というイメージでした。世界遺産の勉強を始めると興味は、「久高島」（ニライカナイなどの神話も含めて）、「グスク」へと変わっていきました。研修旅行前にそれぞれテーマを決めて調べるという課題が出されたので、私は「神話」を調べることにしました。取りかかってみると、どこから調べていいのかよくわからず、まずは「中山世鑑」、「中山世譜」、「球陽」を調べようと本を探すところからとなり、「球陽」だけは国会図書館にもなく諦めましたが、「中山世鑑」、「中山世譜」、「琉球神道記」は訳本を閲覧することができ、それぞれ創世神話の箇所を読んでみました。すると、これまで聞いていたものと異なっていました。また、それぞれの本で記述に異なる点がありました。例えば、ヤハラヅカサにアマミキヨが降り立ったという話は、私が読んだ上記の本には全く書かれていません。現在まで語り継がれていることが、どのような書物に書かれているのか、今後その根拠を探していきたいと考えています。

こうして神話を調べたので、受水走水を見学できたのは、とても嬉しかったです。実際に見る前にはもう少し広い場所をイメージしていました。久高島の伊敷浜は、現在は木々が中途半端に伸び、雑然としているような感じがして、初めて穀物の種を蒔いた聖なる場所というふうには思えませんでした。聖なる場所ということでは、斎場御嶽も観光地化されすぎていて、その年の豊作かどうかを水の量で占うための壺がセメントで固定されている様子にはがっかりしました。しかし、これは御嶽側ではなく我々、観光する側に問題があるはずです。入り口でビデオを見て注意を受けますが、ここから間違っているわけです。ビデオで見た注意は、「騒がないように」などの常識的なことですから、ビデオがなくても、観光する側が常識的になれば、いいだけのことです。私の現在の立場では、世界遺産に興味がある方々へ観光する側のマナーを伝えていくことしかできませんが、しっかり伝えなければいけないと感じました。

もう1つの興味の対象であったグスクですが、曲線が美しい石垣で、アーチの門に魅力を感じていましたが、写真で見ただけでしたので、どのグスクか見分けがつかずにいました。事前勉強会では、石積みの違いを教えてもらい、今回実物を見て、わかった気でいました。東京に戻って當眞先生の石積みの解説を読み返して愕然としました。というのは、座喜味城を見て、「立派な相方積みだわ!」と思っていたのですが、當眞先生によると、座喜味城は、「相方積み風」、「稚拙な相方積み」だそうです。詳細の把握はまだですが、グスクのそれぞれの特徴が理解できたことが大きな収穫です。

「奄美・琉球」の候補地に行くこともでき、森を散策して実感でき、有意義でした。また、沖縄本島の北側へ向かっていく過程で、南側の風景との大きな違いに驚きました。北部へ行くにつれ、松の木が多くなりました。南部では広葉樹が多く、木の葉は黄緑色でしたが、北部は松の木なので濃い緑色になるため、雰囲気は全く異なって私の眼には映りました。もちろん、北部の方へ行くにつれ南部の見晴らしの良い平坦な地形から山の地形になり、南部に比べて木々が多くなるのも実感しました。また北部は道沿いにお墓が多く、以前、玉陵の説明を受けた際、「沖縄のお墓は家のような形をしている」と聞いていたので、まさに目の前に聞いたとおりのお墓があり、この目で見ることで、ある種の達成感を感じました。

総じて、大収穫の沖縄旅行となりました。知人たちには、「沖縄に行ったのにビーチに行っていないし、国際通りに夜遅くちょっと行っただけなんて…」と言われましたが、十分に沖縄を満喫した気分です。小六さん、緒方先生をはじめ研修計画を立ててくださった方々に深く感謝申し上げます。



「沖縄の離島でゆっくり暮らしたい」

終電の中、手すりに寄りかかって目を閉じると、白い砂浜が浮かんできた。

あれから数年、駆け足の出張や離島ばかり訪れていた旅と違い、今回の研修では沖縄の歴史や文化、そして日本における沖縄の役割について、改めて考える大変良い機会となった。

一つひとつ世界遺産を巡っていく中、緒方先生をはじめ、盛本先生や新垣先生、須藤さんやガイドさんから大変丁寧なご説明を伺え、日本の南端にこれほど本土と異なる文化があり、これほど歴史に翻弄された地があったのだと改めて認識できた。酷暑の中、ご説明いただいた先生方、ガイドの皆様には本当に感謝に堪えない。

大陸と日本との様々な影響を受けつつ独自の文化を形成し、守り続けてきた琉球王国。とりわけ琉球神道など特異な文化が大切に継承されているのには目をみはる。素朴な御嶽にも手をこすり合わせて静かに祈る人々の横顔に、琉球人の自らの宗教に対する誇りを感じた。城跡は石の塊の集合体と思っていたが、邪気が溜まらないように作られた美しい流線型にすっかり心を奪われた。

地域の文化を理解するために直接、その場所を訪れることは大切だが、時に問題も生じる。「斎場御嶽の霊力が近年、弱くなっている」と、非常に靈感が強いという沖縄在住の大倉さんから伺った。さらに「斎場御嶽は厳かな場所であって、沖縄の人々がそんなに足を運ぶ所ではない」という琉球新報社東京支社長の新垣さんの話にも驚かされた。神聖な場所へ入る際のマナーの徹底や規制が時に必要かもしれない。

宮里朝光「琉球人の思想と宗教」によると、琉球の信仰は個人の幸福を祈願するのではなく、社会が平和になれば個人も幸福になれると考えたそうだ。

では、「社会の平和」とは一体何か？ 沖縄の平和？ 日本の平和？ 世界の平和？
沖縄の人々は何を見据えているのだろうか？

本土防衛の防波堤となり戦争の被害者となってしまった沖縄は、ベトナム戦争では加害者の顔を持たされた。大陸と日本との狭間で長年、翻弄され続けた歴史体験を踏まえ、平和のシンボルのある場所から再び平和を壊す行為がなされないように、沖縄は未来に向けてどんな情報を発信していけるだろうか。

激動の時代を潜り抜けてきた貴重な沖縄の文化遺産、近い将来世界遺産になるかもしれない沖縄の自然遺産が、「社会の平和」への足掛かりとして貢献できる道がきっとあると信じたい。

最終日、灼熱の太陽にさらされた後、平和祈念公園のバス停脇で思わずアイスクリームを頼む。「これ、シングルじゃなくてダブルの量ですね（笑）」「ううん、それ以上よ（笑）」
至福のひとつき。また来るね、おばあ・・・（心の中でつぶやく）
以上



今帰仁グスクのメンバーとバーベキュー

この度の沖縄への研修旅行は盛りだくさんのプログラムで、しかも内容も濃く、学習できたポイントが多々あった。

その中でも自身が強く感じた下記の二つの点を取り上げたいと思う。

(1) 訪れて見て初めて分かるグスクの価値

以前から沖縄の世界遺産は解りにくいという個人的な感想を持っていたが、とりわけグスクについては、現地に行って自分の目で見て、その場に立ってみて、はじめて価値を認識できるという実感をもった。例えば、中城城跡などは、写真などで見たものより大きいことを実感し、また、勝連城跡では、大きさではなく要塞としての「立体感」を知り、今帰仁城では、廓の持つ曲線の連続性を味わうことができた。また熱意あふれたボランティアガイドさんのお話を聞きながら見学することの重要性を認識した。野面積み、豆腐積み、相方積などの石材の積み方を目で見て理解することや、今帰仁城跡の石材の違いなどは、その場でのガイダンス抜きでは正しく理解できないであろうと思った。

(2) 琉球王国の歴史から学ぶべき日本の立ち位置

緒方先生、盛本先生をはじめ現地の先生方から直接のお話を聴けたことは大変有意義で有難い機会であった。沖縄における歴史的文化的背景を十分に説明していただきながら、その「現場」を見せていただいたことのインパクトの大きさ、学習度合いの深さは計り知れないものがあった。

なかでも私にとって大変印象に残ったのが、眞先生とのお話の中から学んだことであった。琉球王国は中国、朝鮮、日本などという大国を含む国々に囲まれながら、まともに衝突することなく巧みな外交手腕を発揮してきた。このことは、中国、ロシア、北朝鮮などの厄介な隣人たちに囲まれる現在の日本に当てはめられるのではないか — という内容であったと認識した。今回の旅で、沖縄、琉球の文化の違いを肌で感じていた時に伺った、現代日本が琉球王国の歴史から学ぶ点があるのでは、というこの視点には感銘を覚えた。

以上の二点に絞って感想文とさせていただきます。

沖縄研修旅行に参加して

小川 隆雄

私にとっては今回の研修旅行を含めて沖縄旅行は2度目となります。最初に訪れたのは2007年の1月で気候が良く市内を歩いて廻るのには快適でした。1人旅で気の向くままに沖縄戦跡巡りが旅の中心でどちらかと言えば首里城、識名園、玉陵は世界遺産の記録を目的に訪れたように思います。

沖縄の世界遺産は戦争で破壊されたものが多く、特に中心的存在である首里城となれば建築物ではなく「首里城跡」が世界遺産になっている。最初に訪れた時も感じたのですが、沖縄の世界遺産は戦争の打撃を大きく受けたことを思えば広島のように「負の遺産」の枠組みかと今回の研修でその思いが強くなったように思います。

今回の研修旅行は担当された皆さんが情報を集めたり、また現地の方と連絡を密にしたお陰で、団体で廻る旅としては効率的なものになりました。更に地元の方の懇切丁寧な案内があり、思い出の深い良い旅になったものになり関係者各位に深く感謝したいと存じます。

一般の計画ではなかなか出来ない「やんばる(山原)」の森を歩いて比地大滝の往復も組み込まれており、大自然を踏破した達成感が高齢者の自分には印象的なものになりました。

また地元の方たちとの懇親会でお話をうかがう機会も多くあり、現地の人と世界遺産に対する思いや考え方についての話が出来たのは極めて有意義であったように思います。

疲れて帰れば宿は景色の素晴らしい海岸にあり、旅の疲れをいやしてくれたのも大変有り難いことでした。

私は研修が終わると那覇(泊港)からマリンライナーで約35分の「渡嘉敷島」に渡り、35年ぶりにシュノーケルできれいな海を楽しみましたが、実はこれは私の主たる目的ではありませんでした。1945年の3月の東京大空襲を目のあたりに体験した自分にとっては、初めての2007年の沖縄戦跡巡りに続いてこの島を訪れてみたいと思っていたものです。

島の民族歴史資料館を見学し、島民の約4分の1に当たる島民約320の方が集団自決した跡を訪れて参りました。約10キロは何とか地元の方の行為にあずかり車で行きましたが、帰りは炎天下を約2時間歩いてその想いを強くいたしました。

渡嘉敷島の最後の夜、ふとしたことから地元の方のおもてなしを受け泡盛を飲みながら沖縄の三線を觀賞出来た印象深い旅となりました。

最後にご支援頂いた方々に感謝して感想文とさせていただきます。

沖縄研修旅行に参加しての所感を下記致します。

1. 現地の有識者から「琉球王国」の歴史認識や伝統的言語がこれからの世代にちゃんと継承されるのか危惧されるとの意見を伺いました。

1) 日程2日目、今帰仁村近くのレストハウス「ワルミ」に立ち寄りしました。ここからの展望はすばらしく、沖合数十キロのところにかすかに伊平屋島、伊是名島を展望することができる。これらの島はそれぞれ第一尚王統、第二尚王統の創始者の出身地とであることが知られているが、レストハウス売店の若い店員さん(おそらく高校生のバイトと思われる)にこのことを尋ねたところ、彼はこの史実について全く知りませんでした。

2) 沖縄の方々との会話の中で沖縄語ではこういいますとの注釈をよく聞かされます。それだけ固有の言語を誇りにして、且つ大事にしていることが伝わってきて、すばらしいことだと思う。そのことをどなたかに申し上げた時、意外なコメントが返ってきました。今の若い世代には当てはまらない、若い人たちの言葉は標準語化されてきており、沖縄語がどんどんすたれつつあるのが現実であるとのことでした。

3) 上記の二つのことに共通する原因は、教育にあるといえるでしょう。すなわち日本の歴史については、学校では全国共通の教科書で教えるだけで、沖縄固有の歴史は教えられないことがない。又国語についても同様で、学校では標準日本語しか教えない(むしろ沖縄語が排除される)現実が指摘されています。

2. 名桜大学・北部生涯学習センター：地元住民の「文化力」を高める

地元が持つ世界遺産について自らがその価値をよりよく理解するため、又外からの訪問客や外国に対してきちんとしたメッセージを発信するために、地元の住民の「文化力」を向上するための努力をしているというお話を伺いました。

生涯学習センターの枠割はまさにその一環であるのでしょうし、修学旅行の学生を自宅に泊めてホストファミリーとして地元文化について学習の指導をする「民泊」プロジェクトも推進されていると伺いました。きわめて意義深い活動だと思います。

さらに絶滅危惧種のヤンバルクイナ等固有の小動物の保護のためにマングース、野ネコ等の駆除に地域が全力をあげて尽力されている現状も伺いました。こういう地道な市民意識の向上・自治体の協同、連携の活動が次の世界遺産候補「奄美・琉球」の自然遺産登録実現につながることを信じます。

3. 遺産の「Authenticity」の保持について感じたこと

各グスクをはじめとしてその他の遺産サイトでの修復・保全を進める際の最大のネックが、「記録が残されていない」という現実であることを伺いました。世界遺産価値を大きく左右する「真正性」をどう具現化するか、又今後維持・保存に生かしていくかの上で大変大きな課題であることは容易に理解できます。薩摩による支配時期又は、明治維新後の「琉球処分」の際に時の政権者によって意図的に破棄されたのか、又は第2次大戦によって失われたのか不明なのですが、修復・保全に関わる方々の苦勞がしのげられます。

4. その他世界遺産とは直接関係ありませんが、今話題となっている尖閣諸島の帰属についての地元の方々の率直な歴史認識や、公式日程後に訪問した渡嘉敷島で在住のお年寄りの女性から大戦時の貴重な話を伺えたのも印象に残っています。

5. 世界遺産クラブでは、過去下記の研修旅行を実施してきました。

- ・日光の社寺修復見学会(2008)、
- ・佐原市と香取神社見学(2009)、
- ・無形文化遺産「チャッキラコ」見学と鎌倉の寺院散策(2011)、
- ・白神山地モニターツアー(2012)

クラブの設立から6年になりますが、今回の沖縄の世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」を巡る研修旅行は大変に中身の濃い充実した研修旅行になったと思います。

限られた日程の中で、地理的にも離れた世界遺産構成9要素サイトのほぼすべてを、機能的に且つ効率よくカバーすることができたこと、何よりも考えられるトップ水準の先生方に現地でのご案内、説明を頂けたこと、そして世界遺産に同じ思いを持つ方々との交流、意見交換が実現できたが挙げられると思います。

緒方先生ほかご厚情を頂きました方々に熱くお礼を申しあげる次第です。



久高島にて

2014年8月7日

沖縄研修旅行感想

野澤 順治

沖縄の地、私の思っていた以上に「神」を崇拝する、お参りする人々の多さと拝所、また集落の祭事、祈念場所、そこでの行事が続いているのには驚かされました。何処へ行っても拝所が。それも仰々しくまつりたてているのではなく、石でちょっと囲ってあったり、石を立ててあったりの本当に普通の場所にちょこっと、という感じで。グスク跡にある拝所も質素なあまり目立たない箇所につつましく。

私たちから見ればここが神聖な場？と思われるところが昔からこの地の人々に言い伝えられ、守られ、拝されている大切な所。その精神は、私たち日本人の忘れていたものの「何か？」を気づかせてもらえたような思いがありました。と同時に、このような精神的なもの・心、が沖縄の人たちにあるということに「ほっとしたもの！」をも感じたいです。

このことは、紀元前から、また14世紀後半からは「琉球」という独立王国として江戸時代の初期まで、中国、日本、南方の国々との交流、交易で繁栄、独自文化の構築・伝承。これらの文化と誇りが人々の中に流れており、拝所で拝みながら今も思いを・・・

また、江戸幕府、薩摩藩傘下に入りながらも、琉球王国の誇りを内に秘めながらの神への祈り、その精神は今も琉球王国そのもの？

自然と祖先崇拝、王国時代からの精神・伝統が独特の信仰に。また海に囲まれ、緑のすばらしい島という背景があったのも信仰につながっているのでしょうか。

シーサー、石敢当に見られる魔よけを屋根や門柱に、結構普通の家に見られる風習が残っているのも神を信じてのことか。民家に結構設置している、残っているというのも「信ずる」という心が強いのかと。また神社、寺が少ない、殆ど目立たない。したがって、氏子、檀家の制度もあまり無いようですが「ニライカナイ」、これを信ずる、自然と祖先を崇拝し拝む、というところに沖縄の独特の信仰が形作られ、本土とはかなり違う信仰形態ができたのかと思います。

最後になりましたが、世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」のすべてを回れ、充実した研修になりました。これは、アカデミーの安藤様、小六代表はじめ、世界遺産クラブ幹事の皆様、沖縄の緒方様、當眞様、新垣様、盛本様、現地関係者の皆様のご協力があってこそのもっと厚く感謝申し上げます。

2012年8月10日

鶴谷 巖

沖縄には、1999年～2003年の石炭開発部勤務の時代に、火力発電所向け石炭や石炭灰処理技術の関係で、沖縄電力や電源開発をしばしば訪れた。ただ、観光らしきことはあまり行っていない。そのうち、少し観光もしたくなって、2003年に、女房と沖縄観光旅行に出かけた。定番コースで、ひめゆりの塔、那覇市内、首里城、万座ビーチ、美ら海水族館、パイナップル園等。美ら海水族館の帰途、今帰仁城跡という昔の城跡があるらしいということで、レンタカーで立ち寄っている。当時、世界遺産は未だ意識外だった。

2009～2010年に世界遺産検定を受けることになった時、一応日本の世界遺産のひとつとして、その構成資産の説明を試験問題に答えられる程度に暗記したが、実物をほとんど見ていない、沖縄の歴史そのものをほとんど理解していない等、かなり表面的なものであり、検定試験を終えるとききれいさっぱり忘れてしまった。

今回の世界遺産クラブの沖縄世界遺産研修旅行の話聞いた時、昨年京都・奈良の世界遺産の全構成資産巡りを行って、計画・予習・写真撮影・旅行記作成等その醍醐味を経験していたので、参加を申し込んだ。別に期待していた訳ではないが、事前勉強会で構成資産＋沖縄の歴史や民話など構成資産のベースとなる知識を吸収する機会があったので、少なくとも現地に着く前には、相当の世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」通になることが出来た。正直、今回の予習前までは「御嶽」の正確な意味を知らない（完全に忘れてる）状態だった。

加えて、現地での案内や交流会・懇親会で世界遺産申請時の関係者やボランティアガイドの方達の協力で表面的な観光だけではなく、琉球の歴史・文化・世界遺産を維持・継承していこうとする動きの実態を知ることが出来、有意義だった。特に、「今帰仁城を学ぶ会」の方の案内、交流会は印象深い。ボランティアガイドをする意志のある方は多く、中心になってまとめる人物がいれば組織的に活動できるという見本のように感じた。

今回の研修旅行の企画・手配を行っていただいた世話役の方にはお世話になりました。当初の計画では9個所の構成資産全部を回ることが考慮されていなかったもので、私は、「学ぶ」「知る」と同じように「見る」ことも意義ありと考えて、日程を延長して全9個所を回ることが出来た。そういう意味では、質・量とも今回の世界遺産研修は、暑かったものの熱くて楽しい夏休みのイベントだった。もちろん、リゾートマンションでの3泊4日の合宿生活は、学生時代の修学旅行を思い出させる楽しいプラス要因だったことも付け加えたい。

沖縄研修報告

轟 光代

沖縄研修旅行では、大変お世話になりました。

沖縄には、何度も滞在したことがありますが、いわゆる一般の旅行として、また、仕事での滞在のみでした。今回は世界遺産見学という大きな目的がある旅、しかも世界遺産にご尽力された諸先生方のご案内もあり、素敵な滞在をさせていただきました。

また、私の遺産への知識が、膨大に広がり、とても有意義な数日でした。沖縄のグスク、沖縄と諸外国とのつながりの深さ、偉大なる南の国沖縄の知識をたくさん詰め込んでまいりました。

個人的には、興味がとても広がり、もう少しゆっくりまた訪れてみたいという思いを残してまいりました。今回は、少し涼しい時に・・・

はるか南の沖縄での日本の幕開けを担った王たちの話、昔から伝わるお参りなど、まだまだ知りたいことがたくさん課題として残されました。

最後になりましたが、緒方先生はじめ、諸先生方、大変お世話になりありがとうございました。またクラブの小六さん、皆々様未熟な私に色々知識の糧をいただきありがとうございました。

1、世界遺産とは

地球上には人類が築いてきた文化や貴重な自然がたくさん残っている。そのうちとくにすぐれた文化と自然が「ユネスコの世界遺産」として選ばれ、登録される。世界遺産とは、1972年のユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産および自然遺産の保護にかんする条約」に基づいて世界遺産リストに登録された世界中の自然や文化のこと。

沖縄県の文化遺産が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」という名称で世界文化遺産として登録されたのは、今から14年前の2000年12月のことだ。

2、琉球王国のグスク及び関連遺産群

日本で11件目の世界遺産登録となった「琉球王国のグスク及び関連遺産群」は、独立王国として独自の発展を遂げた琉球地方独特の文化遺産が対象になっている。その内容は今帰仁城跡・座喜味城跡・中城城跡・勝連城跡・首里城跡・玉陵・園比屋武御嶽石門・斎場御嶽・識名園など9カ所の遺産群からなり、5つのグスク群とそれらに関連して残されている記念工作物や文化的景観によって構成される。いずれも琉球が王国を統一した14世紀後半から18世紀末にかけて生み出された琉球地方独自の特徴を表す文化遺産群だ。

3、世界遺産を構成する資産群のコンセプトについて

世界遺産として登録されるためには、資産群を構成する文化遺産の全体を貫く統一した視点を立て、そうした視点にあった遺跡を選んでいくことが最も重要だ。なぜなら、世界遺産の厳しい審査をパスしていくには、推薦された文化遺産の内容が世界遺産条約で決められている顕著な普遍的価値の評価基準に合致しているかが問われるからだ。だから世界遺産を構成する資産群のコンセプトをしっかりと決め、世界文化遺産でいうならば1から6ある評価基準のうちどういう基準で登録されるのかということがきわめて重要なポイントとなる。沖縄の場合には話し合いの結果、推薦書原案を作成する段階で、琉球王国の歴史をストーリーとして仕立て説明することになった。

九州本土を離れて花綵のように連なる島々つまり琉球列島。そのうち沖縄諸島と先島諸島、そして奄美諸島を合わせた島々の歴史は、日本本土と遠く離れていることもあって中国大陸や東南アジア諸国の影響を受け特色ある文化を発展させ独自の歴史を歩んできた。沖縄の文化遺産は最終的にはこうした琉球王国の歴史に引き付けて説明することで外国人の理解につなげようとしたのである。そのため遺跡の選定にあたっては、琉球の歴史と関係の深い下記3つの視点が重視された。

- ①王国誕生期及び王権確立に関係の深い文化遺産であること。
- ②琉球王国の政治・外交に関係の深い文化遺産であること。
- ③琉球王国の精神文化に関係の深い文化財であること。

①では、琉球に統一国家が誕生するまでのプロセスと王権が確立していくまでの一連の流れに関係が深い遺跡として、首里城跡をはじめとする5つのグスクが選ばれた。

②では、琉球王国が400年余の長期にわたって存続したのは、王国統治と貿易による国家経済を巧く成り立たせていたという理由から政治・外交に関係の深い遺跡として、玉陵と識名園が選ばれた。

③では、精神面から国家統治を支えていたという側面から精神文化を象徴する遺跡として、園比屋武御嶽石門と斎場御嶽がそれぞれ選ばれることになった。

4、世界遺産への登録基準

さて、上述のように最終的に9つの文化遺産が推薦されたのであるが、世界遺産に登録されるためには、まず世界的に顕著な普遍的な価値を有し、真実性や完全性の証明がなければならない。そして前述したように世界遺産委員会が定める登録基準の一つ以上を満たすことが必要だ。さらにバッファゾーンの設定など世界遺産としての価値を将来にわたって継承していくための保護措置が講じられていなければならない。こうした厳しい条件をクリアーしてはじめて世界遺産への登録が可能となる。

5、グスクについて考える

グスクとは沖縄の城の総称である。こうしたグスク遺跡は、13世紀～14世紀ごろから築かれはじめる。このころ、琉球では按司と呼ばれる豪族層が台頭してくる。按司たちは農業や東アジアの国々との貿易で得た富を背景に周辺の地域を支配し、互いに支配権を争うようになる。やがて沖縄本島では北山、中山、南山という三大勢力に集約され、このなかから中山の尚巴志が台頭、北山と南山を攻略して琉球を統一する。15世紀ころのことだ。

今、各地のグスクを歩く歴史愛好者が増えている。グスクを歩く楽しみは、石垣などの遺された遺構群の中に国家形成期における琉球社会の緊張した姿に思いを馳せ、私たちに知的探検に誘ってくれることである。そしてもう一つ、グスクは軍事的防御施設という本質以外に建築、土木、都市、経済史などの豊富な情報を有しているということでもある。グスクはまさに琉球歴史を代表する遺跡だ。

グスクには世界遺産となった首里城跡や今帰仁城跡のように広い面積を有し、りっぱな石垣の城壁によって築かれたグスクがある一方、岩石だらけの狭い台地に野面積みの石垣をめぐらしたグスクもある。さらにまた沖縄本島北部や奄美諸島に多く見られる土より成るグスクもある。いずれの場合も、グスク普請にあたっては、攻城軍から城をどう守るか、また敵を撃退するためにどうすればよいか、そのための曲輪配置をどうするかなど、築城プランである縄張りについていろいろ工夫されている。

では、絵をみながらグスクの戦いの工夫について考えてみることにする。

資料1は、座喜味城の城門を中心とする出っばりのある城壁周辺での攻防の様子を描いた図だ。城を守る城兵たちは城壁が突出し、どこにも矢がうてるのでとても効果的。逆に城を攻める攻城軍は正面、横、後方から矢が飛んでくるのでなかなか城が攻められない。また、隣の仲間たちに応援をもとめようにも城壁が突出しているせいで連繫プレーができずその場に立ち往生。そのうち矢にうたれて死んでしまう。

資料2は、今帰仁城攻防の様子を描いた図だ。今帰仁城のノコギリの歯のようにぎざぎざになった城壁での攻防。グスクの石垣は屏風状にゆるやかなカーブを特徴とする。石垣が屏風状になっているのは台風のための強度をもたすためとする説明もあるがそれは誤り。ぎざぎざの城壁の意味は、城壁に殺到する敵兵を側面から観察し、死角といって矢のうてない所をなくす工夫がされている。また、出っばりがあることで横との連繫プレーも不可能。

このように沖縄で築城技術が発達したのは、一つには中国や朝鮮半島との交流を通じて大陸の文化を吸収した結果であり、そのときに築城技術についても大きな影響を受けたからであった。したがってグスクを考える場合は東アジア的な視点を持つことが必要となる。

資料1 座喜味城攻防の様子



資料2 今帰仁城攻防の様子



研究会「文化遺産保護と住民参加」に参加して

高木 規矩郎（日本イコモス会員）

文化遺産国際協力コンソーシアムと国立民族学博物館主催の研究会「文化遺産管理における住民参加」が6月末、東京で開かれた。鎌倉世界遺産登録挫折の主な原因の一つは、住民と行政の登録に対する意識の隔離にあった。沖縄の遺産管理における住民意識はどのようなのであろうか。「住民参加」は今後の再挑戦の去就を見る上で重要なテーマである。ペルー、フィジー、ミクロネシアの事例報告とパネルディスカッションから住民の目線で文化遺産保存を考えるヒントを探ってみた。



《石の家の意識変革》

長くカンボジアの遺跡保存にかかわってこられたコンソーシアムの石澤良昭会長（上智大学学長）が開会あいさつで「住民参加」の意義に触れた。「住民はアンコールワット遺跡を『石の家』とみていて、文化遺産との認識はまったく見られなかった。そこで日本からの遺跡管理チームは、地元の子供たちを遺跡現場に連れて行って、『1000年前の人たちが使ったものだよ』などと、遺跡保護の重要性を説明する教育キャンペーンを始めた」世界的に知られる文化遺産の宝庫でも、住民参加は遅れがちな現状のようである。

《なぜ今、住民参加が必要なのか》

民博研究戦略センターの関雄二教授（アンデス考古学）は、「観光開発を文化遺産保護に対する敵とみなしていたユネスコばかりでなく、各国の機関まで観光開発との共存を積極的に推進していくべきだとの立場を鮮明にしている」との見解を示した。途上国などでは文化遺産を守るためにはまず稼げと号令がかけられているようで、もっとも身近な資金獲得手段として観光に光が当てられていると分析している。

ペルーのチャチャポヤ遺跡での事例について北海道大学観光学高等研究センターの西山徳明センター長は、「長年培われてきた地域住民と遺産との関係が断ち切れ、遺産サイトは研究者と観光客だけの場となった。地域社会にとっては身近な遺産はまさに『死んだ遺産』となった」と言った。遺産への誇り、愛着、信仰心などの再生を通して、地域社会に意味をもたらす「生きた遺産」にすべきであるとの主張である。

同じ研究センターの八百板季穂准教授は、フィジーの世界遺産「レブカ歴史的港湾都市」での調査研究を踏まえ、住民の生活から生み出される無形遺産の把握、歴史都市の価値の見直しなどを通して、コミュニティを基盤とする遺産保全のシステム構築と観光開発をテーマに取り組んでいる。ユネスコ太平洋事務所の益田兼房さんの事例報告では、「住民と無関係なところで文化的景観が語られているのではないか」との指摘が印象に残った。

《博物館は住民参加の前提》

最後に事例報告をした研究者が参加してパネルディスカッションが行われた。パネラーとして英イーストアングリア大学の松田陽(あきら)准教授が加わり、住民参加を「いかに実現するか」について体験を語った。博物館の存在意義に触れ、「住民が文化遺産管理などについて学習できる場が必要である」と議論を展開した。さらに日本では大きな博物館になると展示物に監視カメラや有刺鉄線が張り巡らされているが、「(文化遺産に肌で接するということからすると)明らかに行き過ぎである」と述べた。

《鎌倉での住民参加を考える》

研究会のテーマではなかったが、都市開発が進む鎌倉にとっても「住民参加」は重要な視点を与えてくれた。JR 鎌倉駅に近い市役所に隣接する御成小学校グランド地下に眠る埋蔵文化財(中世武家屋敷跡)の30年以上に及ぶ保存管理について、「住民参加」の意義を根底から問い直す比較検証の対象ともいえるべき動きがあった。

1990年代に校舎の改築に先駆けて行われた発掘調査の際、中世遺跡の下層面で古代の役所跡を示す郡衙遺構も見つかった。中世遺構の確認が目的の調査だったために、郡衙については十分な調査も行われずに埋め戻され、現校舎は旧校舎と同じ場所に木造と軽量鉄骨で立て直された。一方神奈川県立茅ヶ崎北陵高校改築現場で見つかった郡衙遺跡は、いずれも公立校の改築に関わるものだったが、結果は対照的だった。

行政はもとより市議会からの協力もあって、市民が遺跡保存の中心に立ってきた。県教委は当初の鉄筋校舎を鎌倉様式と呼ぶ木造2階建てに変更した。しかし市民はこの工法には納得せず、高校を移転させて郡衙遺構をそっくり保存活用するよう主張しつづけて、今年2月に校舎の全面移転という形で決着した。鎌倉と茅ヶ崎では「住民参加」のありようが結果として大きな相違を生み出した。

開発や教育環境の改善という錦の御旗を掲げた文化遺産保護なので、観光振興のための「住民参加」がテーマとなった東京での研究会とは同じレベルでは論ずることはできないであろう。観光客の激増や慢性的な交通渋滞に悩む鎌倉では、世界遺産登録を懸念する市民も少なくなかった。「住民参加」にも大きなハードルがあり、開発が進む近代都市鎌倉と規模の小さい地域社会とでは、同列には考えられない一面もあるようだ。

それでもパネルディスカッションでの討議も含めた問題提起では、都市開発が進む鎌倉も無視できない事例報告が行われた。まず文化遺産保存について子供たちが現地で学べるカリキュラムを充実し、「歴史と共生するまちづくり」に欠かせない博物館やガイダンスセンターを整備する。次いで観光開発と文化遺産保護の共存を図るとの指摘である。確かに混雑や交通渋滞など観光公害的な状況にはあるが、国際観光都市としての看板を下ろしたら鎌倉には何も残らない。積極的に共存を考えるべきであろう。

地域社会にとって身近な存在である「生きた文化遺産」の確立も見過ごせないテーマである。御成小学校のように鎌倉の遺跡は、まさに「死んだ文化遺産」の状況である。文化財保護法の強化や必要な条例設定などによって「生きた文化遺産」に変えていくことも、いずれ考えなくてはならないテーマになるであろう。そのときは「住民参加」のありようも大きく変わってくるであろう。



下寺尾西方A遺跡 調査風景

世界遺産のまち

宮澤 光 (世界遺産アカデミー)

羽田から沖縄へと向かう飛行機から見下ろすと、富士山の山頂にかわいらしい傘雲がのっているのが見えました。快晴の中、雲も新しく世界遺産になった富士山がお気に入りのようです。すでに入梅している沖縄に向けて下降してゆくと、厚い雲の下には重く灰色の沖縄の海が広がっていました。

約15年ぶりに沖縄に来てみると、街の景色がずいぶんと変わっていました。空港からはモノレールがのび、街中には高層マンションが立ち並んでいます。その一方で、首里城周辺を歩いてみると、昔から変わっていない「沖縄らしい」家や店も残っていて、どこかほっとします。こうした「沖縄らしい」家はずっと残って欲しいと思います。しかし、古くからある「らしさ」を残して欲しいというのは、外から訪れる人の傲慢さではないのでしょうか。

旅行者はしばしば、イメージの中でつくり上げた「らしさ」を求めて旅行先を訪れます。旅行先で「らしさ」を見つければ満足し、見つけられなければ落胆します。旅行者は、旅をする前につくり上げたイメージを、実際の旅行で追体験しようとしているに過ぎないとさえ言えます。しかし、こうした旅行のあり方は、旅行先となっている土地に住む人々の生活を無視しています。不便であっても昔ながらの街並を残して欲しい、昔ながらの生活スタイルを続けて欲しいというのは、そこで暮らす人々が生活の質を上げる権利に反しているからです。

世界遺産の考え方は、どこか旅行者の視点と似ているように感じる場合があります。世界遺産というのは、街や遺産の「ある一点」……顕著な普遍的価値があるとされた時点、で時間を止めて、それを守り伝えていく、というのを前提としています。もちろん、時間を止めるとはどこにも書いていないのですが、世界遺産条約の運用をみていると、どうなのかなと思ってしまいます。例えば、ドイツの中世の街並が評価されたドレスデン・エルベ溪谷は、2014年に完成した橋により伝統的な景観を損なわれたとして、世界遺産リストから削除されてしまいました。中世から21世紀までの景観という新しい価値は認められませんでした。

街は生きています。常に変化してゆく街を、ある特定の時代のままに留めておくことは、困難であるだけでなく、街の本来のあり方としておかしいことです。

ではどのように開発を進めてゆけばよいのでしょうか。2005年の「歴史的都市景観の保護に関する宣言」では、開発と遺産の保護のバランスが重要であるとしています。そして世界遺産の普遍的価値の保護は、「どんな保護方針や運営方針よりも中心に据えられるべきである」とも書かれています。つまり、経済成長のための開発は必要だけれど、世界遺産の価値を落とすような開発はすべきでない、とされているのです。現代建築は、歴史的景観の価値を高めるもので、かつ歴史的都市景観に溶け込むものでなければならないと。

景観保護は、景観を守ることで地域の人々のアイデンティティが強化されると同時に、観光などに訪れる人々も満足させるというというのが望ましい姿です。その点で、持続可能な観光開発とも密接に関係しています。

首里城や玉陵、斎場御嶽など、沖縄の資産の世界遺産としての価値は申し分ありません。今回、大雨の降る中、誰もいない玉陵で感じた畏れにも似た思いは、多くの人に感じてもらいたいものです。そうした魅力を伝えてゆくうえで、構成資産をとりまく周囲の環境も遺産価値を守り伝えてゆくために重要なのです。世界遺産のある街に住む意味を、これからも大切に考えていてもらえると嬉しいです。



スペインの世界遺産 サラマンカ

五藤 克己（元文化放送記者）

サラマンカは、古代ローマ時代に起原を持つ「銀の道」の中継地として栄えました。銀の道は、古代ローマ人がスペイン北部のカンタブリア山脈で産出された金や銀を運んだところからその名がついたものです。歴史的には、カルタゴ人、ローマ人、アラビア人がスペインを南北に移動する幹線となった道です。このためサラマンカには、歴史的、文化的、宗教的なモニュメントが数多くあり、旧市街全体が世界遺産に登録されています。

また中世以降は、スペイン巡礼路（カミーノ・デ・サンティアゴ）の4つのルートのひとつ、「銀の道」の途上にある街として、多くの巡礼者を迎え、送り出してきました。

「貝の家」と呼ばれるゴシック様式の建物は、かつてはサンティアゴ巡礼者を守る騎士の家で、外壁は巡礼を象徴するホタテ貝の模様で飾られています。

サラマンカ大学は1218年に創建され、ボローニャ、パリに次いで3番目にローマ教皇から大学として認められた歴史ある大学です。コロンブスも一時、この大学に通っていたと言われます。

大学の正面入り口には精緻なレリーフが刻まれており、大学生の間に伝わるひとつの伝説があります。様々な文様の中には骸骨も刻まれており、そのうちのひとつだけにカエルが乗っていて、これを見つけると試験に合格するというものです。訪れた観光客も必死に探しますが、見つけるのは至難の業です。

サラマンカは夕陽に映える街です。辻邦生は『サラマンカの手帖から』で、「赤い、ながいサラマンカの夕陽が、（中略）この町に斜に照りつけていた」と、その独特の景観を愛でています。この街を訪れるなら、夕方の時間はマジョール広場で過ごすことをお勧めします。

ガイドブックには「スペインで最も美しい広場」などと紹介されていますが、景観もさることながら、寛ぎのときを楽しむ市民たちの様子が何とも言えぬ豊かさを感じさせます。



マジョール広場の夕景



ローマ橋とカテドラル



大学正面のレリーフ

若者は広場に直に座り、ベンチには高齢者、人々はゆっくりと広場を巡り、知り合いに会うと立ち話をしたり、バルに寄ってワインやカフェとともに長話にふけります。子どもたちは遊びに夢中です。

私はこのマジョール広場が大好きで、毎日のように夕方訪れては、友人と会ったり、のんびりとした時間を過ごしました。

昼でも夜でもない夕方という時間がたっぷりあり、広場を生活空間として共有する贅沢さ、いずれも日本にはない貴重な時間であり、空間であると羨ましく感じたものです。



**9/21(日)
実施!**

2014年

沖縄歴史検定 奄美・琉球世界遺産検定

沖縄歴史検定

9/21(日) 9:30~10:30
検定料1600円
歴史・文化・地理を50問に分けて問います。

参考書としておすすめします—
沖縄歴史教育研究会 編
ジュニア版『琉球・沖縄史』



奄美・琉球世界遺産検定

9/21(日) 10:50~11:50
検定料2000円
有名な世界遺産や奄美・琉球の自然文化を含め全50問に分けて問います。

参考書としておすすめします—
沖縄大学地域研究所 編
『世界遺産・聖地巡り』



***両検定ともに得点に応じて認定証を発行します。
1級…90点以上、2級…78~88点、3級…64~76点**

会場

*電話番号は会場ではなく各担当者の番号です。

| | | |
|----|--------------------------|---------------|
| 東京 | パレスサイドビル9F(千代田区一ツ橋1-1-1) | 098-987-7007 |
| 奄美 | AiAiひろば(奄美市名瀬末広町14-10) | 050-3441-1792 |
| 名護 | 名桜大学(名護市字為又1220-1) | 090-1179-0972 |
| 那覇 | 沖縄大学(那覇市国場555) | 098-987-7007 |
| 石垣 | ICT文化ホール(石垣登野城9-4) | 0980-83-0033 |

**事前講習会 (無料)
開催します!**

①沖縄歴史検定…9/6(土)17:30~
②奄美・琉球世界遺産検定…9/13(土)17:30~
場所:ウエル・カルチャースクール真地校
☎(098)987-7007 那覇市真地329-1

主催:琉球弧世界遺産学会(琉球弧世界遺産フォーラム)、沖縄歴史教育研究会
共催:沖縄大学、名桜大学、奄美テレビ放送、石垣ケーブルテレビ、NPO 法人アジアクラブ、NPO 法人文化経済フォーラム
協賛:NPO 法人世界遺産アカデミー、NPO 法人沖縄エコツーリズム推進協議会
後援:沖縄県、那覇市、名護市、石垣市、奄美市、琉球新報社、沖縄タイムス社

お申込み・お問合せは **(098)987-7007** NPO法人アジアクラブまで